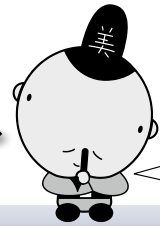


みまさかのくに

美作国建国1300年



いにしえ人が歩んだ道をたどることで、交流や歴史理解が深まるの～。

Vol. 9 街道を歩き、歴史を振り返る

岡美作国建国1300年記念事業実行委員会 ☎35-3434

シリーズ 部会長に聞く②

美作国建国1300年記念事業実行委員会
歴史文化部会長 甲本弘道さん

歴史文化部会では、皆さんが自分の故郷の事を知り、興味を持ち、愛着を持つ「きっかけ」作りのために活動しています。



人は「きっかけ」がなければ、物事に興味や関心を持ったり、愛情を注いだりすることはできません。

そこで、今年度は小学生向けに美作国の歴史をまとめた冊子を作っています。授業などで活用してもらうことで、自分たちの故郷の歴史に興味を持ってほしいですね。ほかに、山中一揆のシンポジウムや倭文織の催しなどを通して、地域に伝承されている多くの出来事やモノを掘り起こす活動も行っています。

美作国建国1300年記念事業という「きっかけ」は、人と人をつなぎ付けてつながりを広げていくと思っています。皆さんがこの事業に参加することで、それぞれの地域が培ってきた歴史や文化を知り、それぞれの地域に共通するモノや事を見出してほしいですね。そうすることで「美作は一つ、力を合わせなければならない」という思いが育まれていくと思っています。



▲本山寺を見学(法然上人コース)

街道歩きは発見と交流の宝庫
美作国の古い街道を歩き、その地に生きた人たちの足跡をたどる美作国の街道歩きが4つのコースで行われました。参加者は、各コースの街道に残る史跡や街並みを巡り、ガイドが語る土地のいわれや



▲坪井宿を見学(坪井・久世コース)

歴史などに耳を傾けて、当時の雰囲気を感じていました。また、地域の特産品を使った弁当や名水で入れたお茶の接待など、趣向を凝らしたおもてなしが行われ、地域の魅力を再発見したり、新たな交流が生まれたりしていました。



※土・日曜日、祝日にはワークショップを開催

プレイベント情報
■美作国の織と色彩
とき 12月15日(土) 24日(月) 午前9時30分～午後5時
ところ 城東むかし町屋(東新町)
内容 幻の織物「倭文織」復元への取り組みや、現代の織物作家の作品展示
※土・日曜日、祝日にはワークショップを開催



▲日本五兵衛の碑

その昔、日本原の地は草木が生い茂る原野でした。今から270年程前の享保・元文年間(1716～1741年)、全国の社寺などを巡礼して回った福田五兵衛が、この地に小さな茶屋を設けます。五兵衛は街道を行き交う旅人に茶を振る舞いながら、見聞きして来た日本各地の面白い話を聞かせ、茶屋は繁盛したそうです。いつしか、誰とはなく、この茶屋のことを日本廻国茶屋、五兵衛を廻国五兵衛・日本五兵衛と呼び、またこの地を日本野と言っようになりました。これが「日本原」という地名の始まりとされています。日本原の東端にある日本原神社には、日本五兵衛の碑があり、西方には今でも、五兵衛の墓標が祭られています。

津山 あれこれ

日本五兵衛(日本原)

きらめく 津山人

笠松青壮年会長
立畠伸吾さん(小田中)

今年、20回目を迎える小田中笠松地区の大きな花火大会。大会を主催する笠松青壮年会長の立畠さんにお話を伺いました。

花火大会を始めたきっかけは?

20年前、青壮年の会合で花火師の資格を持っている会員が「大みそかに花火を上げてみよう」と言い出したのがきっかけのようです。小田中には広い畑があり、冬場は作物を作らないので、畑に穴を掘り花火を置いて打ち上げました。見物客には果物やお菓子を振る舞いました。

どんな花火大会のですか?
私たちのような小さい町内会が、

毎年、花火大会を主催することは珍しいと言われます。しかも本格的な打ち上げ花火が、会場の下から上がるので目の前で花火が開き、迫力があります。最近では、この花火大会に町内会以外からもたくさんの方が来てもらえるようになりました。現在は、おもてなしとして、笠松の青壮年を中心に、笠松町内会や隣接する青壮年の有志に協力してもらって、餅つきをしたり、豚汁や年越しそばなどを振る舞ったりしています。

今年は節目の大会ですね

今年は、例年よりも1時間早い午後9時から始まり、20回の記念として、青壮年会員を含めた有志によるバンド演奏や花火が打ち上がるのに合わせて思いを伝えるメッセージ花火を行う予定です。その後、午前0時の年越しに合わせて来場者みんなでカウントダウンを行い「ゼロ」の

掛け声と同時に花火を上げて、新年を祝います。

今後の活動は?

この花火大会をできるだけ続けていきたいです。城西地区の中で笠松町内会が若い人が活発な地区です。若さをイベントに生かすために、わたしたちの活動を見て、さらに若い人が町内に戻ってきてくれて、青壮年で活動する人が増えてほしいですね。青壮年に入る人は、集まるのが好きな人が多く、主催する側にとってもこの花火大会が楽しみの一つになればいいなと思っています。そして、たくさんの人に喜んでもらえるとうれしいです。

普段は農業を営む立畠さん。物静かな雰囲気の中にも、花火大会や地元町内への熱い思いを感じました。今年の大みそかは花火を眺めながら年を越してみませんか。



▲花火大会の様子

花火大会できるところまで 続けたい